

## 批評・紹介

## 金朝史研究

外山 軍 治著

昭和三十九年十月 東洋史研究會 A5判  
六七九頁 索引・年表三五頁 圖版三葉

著者外山軍治博士は、昭和八年京都帝國大學文學部を卒業後、同年發足した京都帝大の滿蒙文化研究事業に参加され、主として金朝政治史を主題として研究を積まれ、昭和八年には渤海國の首都東京城の發掘調査に、昭和十年には熱河・北滿方面の史蹟踏査にも参加して實地に研鑽を積み、終戦後は京都大學・立命館大學・大阪外國語大學に於て、ひたすら研究一途の生活を續けてこられた、金朝史學の第一人者である。この間その業績は「滿蒙史論叢」「東洋史研究」「滿洲學報」「蒙古學」や諸種記念論集に發表されてきたが、此の度それらを整理配列して一書として公刊されたのが本書である。

日露戦争以後、日本の滿洲經營と深い關連を持ちつつ發展してきた我が國の滿洲史學には、これまで二箇の劃期の存したことは藤枝晃氏の所説に見えるが（中國史學入門・昭和二十二年）、昭和初期の滿蒙文化研究には、三上次男・旗田巍・田村實造・外山軍治氏等を始め、東西の多くの學者が、政治・社會・文化等の多様な問題に亘って「よつてたかつて」研究を進められたのであつて、それは正しく第二の劃期と稱するに相應しい時代であつた。ことに金朝史に於いては、東大の三上次男氏が女眞族の社會構成・政治構造を主題

として考察を進められたのに對して、外山博士は、金朝を構成する民族が單一でなく、少數の女眞族を支配階級とし漢・契丹・渤海人等を治下に包含した複合民族國家である點に着目し、女眞族と他民族との複雑な政治交渉の解明に深い意義を見出し、ここにみずからの研究分野を設定して多年に亘り精力的且眞摯な努力を續けられたのであつた。本書に收められた十數篇の勞作は、博士のひたむきな史料への沈潜を通して生れた成果であつて、多様な問題を取扱ひながら、一貫したテーマを軸として一個の學的體系をなしている。從來未開拓であつた此の分野の解明の持つ意義は、金朝史研究上に於ては今更論ずるまでもないが、其の他の關連各民族の固有の歴史研究に於いても、想像以上に深いものがあろうと思う。以下その内容を逐條とりあげて紹介したい。

通論——金朝政治の推移—— 通論とあるが所謂概論風のものでなく、以下に示される各論の所説をふまえその關を補ひながら、しかも從來の諸研究をも丹念に參照し委曲を盡して書かれたもので、いわば外山博士の研鑽の結論である。最新の學説を盛つた權威ある政治史であるとともに、初學者の必讀の入門書でもある。

一 金朝治下の契丹人 第一章「遼室討滅以前の契丹人」では、金初の征遼戰に於ける契丹降人の先導を略述し、契丹降人が遼の制度のままに西北路・西南路統治の最高機關たる招討司の長官に任命されて、チャハル・綏遠方面の諸部族の鎮撫に當てられた點を明かにし、契丹人招討使の發生とその社會的背景を詳述する。第二章「契丹人統治の諸問題」では主として虜軍に視點を向け、虜軍が興安嶺西方のモンゴル系遊牧民及び西夏の侵寇に對する前衛的緩衝體としての重要な機能を持った點を指摘し、都統司の改稱・興安嶺東麓の

契丹人統治を例として、金國が新版圖の統治に際して、舊支配者たる契丹人の舊秩序に於ける優位を尊重し、その政治力を利用したことを解明する。第三章「契丹人の叛亂」では、海陵王期の契丹人蕭裕の叛亂、並に西北路契丹人の亂について詳細な考證を行い、その社會的背景にも省察を加え、第四章「世宗の對契丹人政策」では契丹人による猛安謀克の再編成と世宗の彈壓政策を説き、第五章「金末における契丹人の動靜」では、金末、北滿信州の契丹人がまず蜂起し、亂の鎮定後一二年契丹人留哥が自立して遼國を建設する。その討伐に向つた遼東鎮撫使蒲鮮萬奴との關係、モンゴルの木華黎・チンギス汗等との交渉も解説した後、一二一四年金の南京遷都による南遷をきらつて叛亂を起した亂軍がモンゴル軍に降り、その嚮導をつとめて中都攻圍に加わるまでの經過を考察する。

二 金朝治下の渤海人 金代渤海人の研究は、渤海後史研究としても、女眞族の多様な社會構造のありかたの解明上にも重要な意義を持つが、従來未開拓であつた。著者はまず渤海遺民が主として遼陽に居住する事情を略述し、金朝治下の渤海人の實態を「松漠紀聞」の記事へ深い考察を加えることによつて解明する。すなわち彼等は遼より田土を付與された上、賦税並に關市の税も免除の特權を有し、ただ戦時の兵役のみ義務づけられていた。かような政治的保護下に在つて遼陽の渤海人は、人戸も五千に増加し勝兵三萬を算する等の經濟的繁榮を享受したし、園地を造作し牡丹を賞するなど、嘗ての渤海國繁榮時代に培養された中國趣味を持ち續ける富豪も存した。名流の子女の姿徳ある者は金廷宗室の側室として金室内への漢文化の移植に貢獻した、などの點を明かにした後、楊朴・遼陽の張氏・熊岳の王氏等を舉例して、金朝に出仕した渤海知識人が漢人以

上の親近感を以て待遇されたことを明示し、かかる親近感が海陵王・世宗・或は數多の諸王の母が渤海人であるような、特殊な婚姻關係に基くことを指摘している。

三 金朝の華北支配と傀儡國家 本篇は次の三論文により構成される。

(一) 山西を中心とした金將宗翰の活躍 金初より太宗期までは、金國が女眞本地の統治に専念し國力の蓄積につとめ、華北の經營には植民地支配以上の意義を認識しなかつた時代であつた。著者は後年の海陵王遷都による華北の直接統治に深い意義を見出し、その前驅としての劉豫の齊國に着目し、齊國創立に深い關係を有した宗翰の足取りをたどることによつて、次第に中國風化する金國の成長のさまを蹟づけている。著者は金代初期の山西地方の特殊事情を解説し、この地が戰略的にも政治的にも、多様な懸案達成の爲の樞要の地であつたが、西北・西南兩路都統宗翰が西京大同府に駐留して以後山西は永く金の前進根據地となつたとし、天會三・四年の伐宋戰の宗翰の戰歴をたどりつつ、その勢力強大化の過程を追求した。此の間に金の樞密院について詳細な考察がとげられている。ついで宗翰の行つた河東・河北經營を考察し、天會六年陝西攻略を下命した彼が、一方では兩河の地の確保に盡力し、路・府・州・軍・縣の改稱、女眞風辮髮の強制、漢服着用の禁止等の一連の政策を實行し、新しい統治の徹底に強い政治力を發揮したことを解説する。著者はまた劉豫の齊國の成立を宗翰のかかる統治方針の延長に於いて把握し、その傀儡的性格を明示し、太宗の死が宗翰一派の没落を誘ひ、宗翰が兵馬の權を失つて憂死するまでの事情を説明し、齊國衰亡の因も支持者宗翰の失脚によると指摘する。

(一) 燕京における遼宋金三國の角逐 常勝軍の總帥郭藥師の生涯を政治史的背景に於てとらえ、燕京をめぐる三國の葛藤にあざやかな分析を示した一篇。第一章では郭藥師の常勝軍はもと怨軍と稱され、一一一六年遼が金軍防禦の目的で編成した雜軍であつて、成員は概ね渤海人・漢人等の飢民であり、當初本據が衛州蒺藜山に存した。天輔六年金の太祖が中京大定府を陥れ、燕京の天祚帝が山西に逃亡し、耶律淳が燕京に擁立されて帝を稱すると、怨軍は常勝軍と改稱されて淳の私兵化し、郭藥師は上將軍に陞進するまでを叙述し、第二章では天輔六年耶律淳が没し宋軍の燕京攻撃が開始されると、郭藥師は常勝軍を率いて宋に降伏する。その前後の事情、金の太祖の燕京入城後の宋金交渉の經過、燕京都民の動搖等が、委曲を盡して描寫されている。阿骨打が燕京等六州の交割を條件に、松亭・榆關外の民戸の徙民を要求した事實に對して、阿骨打に土地侵略の野心がなく、滿洲本地の國勢の充實を計らうとした意圖を示すとした著者の指摘も看過すべきでない。宋國の治下に編入後の燕京における常勝軍の横暴と兵勢激増のさま、並に養兵財源としての免夫錢の問題を論じ、張覺の破滅による常勝軍の動搖を説いた後、天會三年金軍に降伏後開封攻圍に参加し、金軍の華北侵入を容易ならしめた常勝軍が、天會四年金の宗望の手によって全滅せしめられるまでの經過を叙述する。

(二) 劉豫の齊國を中心としてみた金宋交渉 第一章第一節では、宋都開封を陥れた金國は張邦昌を冊立して皇帝とし國號を楚としたが、張邦昌は自殺し楚國は三十二日で消滅。その後華北統治に行政的自信を持ち得ぬ金人が、宋の高官劉豫を起用するまでの事情を解説する。第二節では劉豫の略歴を述べ、知濟南府の時謀叛を決意し

て、金軍防禦に力戦する諸將を殺して金に降つた劉豫が、天會七年黃河道以南の金軍占領諸州の節制を命ぜられた經過を叙述し、劉豫を任用した人物に撻懶を推定している。第三節では「劉豫冊立の事情」を論じ、天會八年劉豫が宗翰に擁立されて大齊皇帝に冊立されるまでの諸事情を、撻懶・宗翰などの劉豫の背後に存した後援者相互の諸關係をも、明確に分析しながら解説し、第四節では「齊國の内政」について、會編・要録・宋史の記載を照合しつつ、版圖・官制・地方制度・兵制・税法・鑄貨等の多様な問題をとらえて詳論する。第二章「齊國の建設と金宋の動向」では、金・宋兩國の立場から齊國の傀儡的性格を解明し、第三章「齊國をめぐる金宋の抗争」では、阜昌三年劉豫の汴京遷都前後の事情を論述し、第四章「齊國の廢止」では、熙宗の即位を契機として熙宗・撻懶を中心とした反宗翰運動が具體化され、宗翰の失脚が劉豫の没落を招き、齊國は八年にして滅亡し、舊齊領土が金國に收拾される過程を考察する。齊國存續八年間に金朝は漢人統治の經驗と自信を得たとし、齊國廢止は金の中央集權化の政治的表現であると指摘している。

四 熙宗皇統年間における宋との講和 第一章「皇統講和成立以前の金室」に於いては、熙宗即位後の金の内政の推移と熙宗の君主權尊嚴化の爲になされた諸工作を考察し、宗翰打倒運動に暗躍した宗磐・撻懶・宗幹等が、それぞれの不満を藏しつつ勢力を擴充する事情を解説する。第二章「天眷二年の和議」では、かねて宋との和議を望んでいた撻懶が熙宗主流派の反對を押しきり、宋の秦檜との間に河南・陝西の宋への還付を條件として第一次和議を成立せしめるが、金室に内變が発生し宗磐・宗構・撻懶らが相ついで殺され熙宗派の獨裁權が確立するや、對宋方針が一變するまでの過程を詳述す

る。第三章では「金軍の河南・陝西回復」を論じ、これと交戦した宋軍諸將間にも不和を生じ、これに乗じた秦檜が諸軍を解消して中央軍に改編し、和議締結の態勢を整備するまでを叙述し、第四章「皇統講和の顛末」では、モンゴル族の侵入・金軍兵力の不足等の内部事情から、金帝及び宗弼等が宋に對する積極的行動を断念して宋との和議に傾き、和平交渉を進行せしめる経緯を考察し、第五章「誓約の實行」では、和議の誓約條項が宋側によって實行されたか否かを、境界線の設定・南北士大夫の送還・歲貢・金の宋帝冊立等の各項について解明する。第六章「皇統講和の成立と金國の動向」では、講和後の金國が中國風化する過程、猛安謀克戸の南遷、及び金廷宗室内の暗闘と熙宗が海陵王に弑されるまでの經過を解説し、熙宗の時代は女眞的國家より中國風國家へ移行する過渡期であつたと指摘している。

五 熙宗朝における蒙古の侵寇 王國維はその著觀堂集林所收論文「遼金時蒙古考」「南宋人所傳蒙古史料攷」において、金代熙宗朝の蒙古の侵寇、および金側の防衛、金の屈辱的和陸等の事實は蒙古人自身の記録に明記されず、關連記事は「要錄」その他の南宋人の史書には見えるが、金人の記述したものは一書も存しないと断定し、南宋の史書中の蒙古關係史料も、「金史」と校合すれば齟齬する點が多く、すべて信憑するに足りない」と論じた。これに對して著者は、金の將軍完顏希尹神道碑中の「萌古斯擾邊 王偕大師宗磐奉詔往征之」の一文に着目し、王國維の否定した宗磐の蒙古征討を事實として確認し、その時期を天會十三年十一月以降天眷元年七月以前と推定している。王國維は蒙古侵寇の記事が「金史」に明記されない點を疑い、これを理由に南宋人の史料まで否定したが、著者

は元の順帝時に編纂された金史には、編纂の際修史官によつて元朝に都合の悪い部分が故意に削除されていると指摘している。著者は本書の「後記」に於て、歴史研究上に占める石刻の重要性を述べているが、本篇ではその石刻が論證の有力な根據として取り上げられており、小論ながら著者の史料取扱方法の周密さと、推理の深さを示した力作である。

六 世宗即位の事情と遼陽の渤海人 第一章「世宗即位の經過」では、世宗の出自を述べた後、海陵王が正隆六年南伐軍を起した際、内蒙古・熱河地方の契丹人が徵兵を嫌つて蜂起し、叛亂は遼陽に波及しようとするが、世宗がこれを撃退して遼陽を固守した事情、並に海陵王が自己に反對する勢力の中心と思われる臣僚をしきりに殺害し、世宗の身邊も刺客の監視下に在り、妻烏林答氏も自害を餘儀なくされた、世宗の忍從時代を説述し、正隆六年十月叔父李石の勸説に従つた世宗が、諸軍に推戴されて即位するまでの經過を解説する。第二章「世宗推戴の諸勢力」では、世宗を推戴した勢力を分析考察する。著者は世宗の母の弟に當る李石の出自に着目し、これに深い考察を加えた後、石の父李離詒氏が渤海人であることをつきとめ、これを手がかりとして更に考察をすすめる。世宗は叔父の李石を首領とする遼陽の渤海人を始め、海陵王にうとんぜられて滿洲に残留せしめられた女眞人官僚や、金國治下において不遇な状態におかれていた曷速館路の女眞人等の協力によつて推戴され、海陵王に重視されない宗室や、海陵王とは從兄弟の間柄に在りながら、その猜疑を蒙つて生命までも奪われようとした諸王の來附によつて地盤を固め、豫期せぬ海陵王の死によつて、その主權は急速に確立された、と説いている。

七 章宗時代における北方經略と宋との交戦 本篇は前・後二篇に分かれる。前篇第一章「明昌初年の北方經略の議」では、章宗の即位後北方遊牧民の侵入が激化し、この爲北征が發議されたが實現に至らず、明昌三年以後侵入防禦の目的で界壕が構築された事情を述べ、第二章以下では、明昌六年に始まり承安三年の宗浩のオンギラ

ート・カタキン征討によって一應の成功を収めた金の北伐の經過を、地理的考證や史的背景にも深い考慮を示しつつ詳論する。第五章では「社會經濟上における北征の影響」をテーマとし、章宗時代に諸事奢侈の風潮にあつた金廷が、黄河の治水、北征、堡壘構築に莫大な出費を強要されて財政が漸次窮乏化する過程を論じ、女真戸と漢民戸との反目の深刻化する事情を述べ、泰和四年頃財政緊縮策が行なわれたにもかかわらず、金國の疲弊は南宋に乘すべき機會を興え、泰和四年以降交戦状態に入り、漢人戸との軋轢も深刻化したと述べている。後篇第一章では寧宗の冊立に功を収め黨を結んで政權を得た韓侂胄が、開戦準備を行い吳曦を興州都統に任じ、岳飛に追封して士氣を鼓舞し、遂に邊將をして泰和四年金に侵入せしめ、泰和六年兩國が本格的交戦状態に入るまでの經過を描寫する。第二章では泰和六年五月兩國の國交斷絶以降の戦況を解説し、第三章では、金軍が各方面で有利な戦鬪を展開しながら、一方では和議締結の努力を續け、宋側も敗戦によって戦意を失い、金國の申出を絶好の機會として和議に應じた事情を考察する。第四章「宋將吳曦の金への内附」では、先に陝西の經略に派遣されながら金に内附して蜀王に封ぜられた宋將吳曦が、義軍に殺された後、在蜀宋勢力の強大化したことを論じ、第五章「和議の成立」では、宋國の主戦論者韓侂胄が殺され、その首が金に送られ、歲幣の増額・川陝關隘の還付

を條件に和議の成立を見るまでの經過を述べる。第六章では金宋交戦による金國の財政危機を論じ、宋よりの輸入茶の制限、財政家の登用を述べ、盜賊の跳梁する山東地方の社會不安が、交戦中の經濟的壓迫と、軍民の反目、河決による漢戸の困窮化によると指摘している。

八 章宗時代における黄河の氾濫 窮乏過程にある猛安謀克戸の救済の爲に採用された黄河河灘の括地策に視點を向け、それが黄河河道の變化と不可分の關係を有したことを證し、漢民族の犠牲に於てなされた救済策が、結局兩民族の離反を尖鋭化したことを論じている。金國が淮水以北の占領を終えた天會八年頃は、恰も東北流していた黄河が淤塞して、まさに河道を東南に求めようとしていた時期に當り、この爲に氾濫がくりかえされた。一一九四年、黄河は明昌の河決として著名な大決潰を起して南流し、北流は全く斷絶した。大氾濫の罹災戸には、金國は唐・宋の例にならつて河灘・退灘を官地として支給した。これより先、猛安謀克戸の窮乏を憂慮した金國は、土地調査を行い括地によって救済を行っていたが、河灘の括地に際しても女真戸に對して優先的に配分を行い、漢人耕作地はしばしば沒收され、漢人戸の利益は往々にして不當に蹂躪された。この様な交渉は、黄河氾濫の都度所在にくりかえされ、漢・女真兩戸の反目を深刻化せしめる結果を招いた。著者は金國崩壊の内因の一方を、漢人戸と女真戸との關係の悪化であると指摘し、黄河の氾濫がその争いを尖鋭化する契機を開いたと論じている。

以上の八篇の主論文の外に、文化史關係の六論文が附録として載せられている。

一 靖康の變における新舊兩法黨の勢力關係 靖康初年開封に攻め

入った金軍が、舊法黨司馬光等の子孫を捜し求めて尊敬の意を表す反面、新法黨の王安石の書は破棄するなどの特異な行動を示した點に着目し、新・舊法黨勢力の交替と金人の立場をのべる。

二 金代嗚熱の文化について 嗚熱はまた兀惹・烏惹なども書かれる滿洲の一部族である。著者は「松漠紀聞」の記載によつて、酋長李靖を中心とする賓州の嗚熱の漢文化を述べ、「紀聞」に記載される李靖の妹金哥の生んだ男子が、海陵王の兄の充に當ることを推論し、嗚熱の金室に及ぼした影響を説く。

三 松漠紀聞の著者洪皓について 洪皓は十二世紀の前半、南宋から金に使い、前後十五年間金國に抑留されたながら節を守つた剛直の士として知られるが、适・邊・邁という當代稀な秀才の父として、また松漠紀聞の著者として有名である。本篇では洪皓一代の傳記が系譜・社會的背景等を織りまぜて、極めて詳細に紹介されている。

四 米芾虹縣詩卷跋について 米芾の虹縣詩卷は、數少ない米芾の眞蹟の一として珍重されているが、この詩卷には劉仲游の跋があり、熙宗朝の吏部侍郎田數が、兵火の間に此の詩卷を得て珍藏した因縁が記される。著者は田數の獄の經過を概観し、皇統年間の金國政情の一面を解明している。

五 章宗收藏の書畫について 金の第六代皇帝章宗は書畫の鑑識にすぐれた文化人であつて、書畫の蒐集家であつた。著者は信頼すべき著録中より章宗收藏の書畫を摘記し、鑑藏印・傳世の徑路等について解説する。

六 章宗書女史箴 ロンドン英國博物館藏の傅頤愷之女史箴圖の後幅に書かれている女史箴が金の章宗の書であることを、書中の「恭」の字に闕筆を發見した筆者が、新たな視野から論證している。

以上の論文のほかに、卷頭に完顏希尹神道碑・金章宗女史箴等の寫眞版があり、卷末に金代要圖一葉・金室系圖一葉・索引・阿骨打部長襲任以後の年表が添えられ、利用者の便宜の爲の周到な配慮が示されている。浩瀚な史書から史料を蒐集整理して、新たな分野に學說を生み出す作業に拂われた恐るべき努力の集積と、そこに示された學術的水準の高さに深い感銘を覺える。本書には「大金甲伐錄」（東洋史研究二の二）など短かいながら重要な書評が収録されていないことも残念であるが、著者が深い考究を進められた「松漠紀聞」の校注なども、どこかに眠っているそうである。その外、著者の學識の奥にある未發表の重要な見解も、今後とも惜しみなく示して欲しいと思う。東洋史研究の一般がさうである如く、先學によつて開拓せられた滿洲史學は、今や大きな轉換期にさしかかつている。轉換の方向は各研究者によつて相違もあろうが、いずれの立場に立つにせよ、金朝史の研究にはまず先生の業績の繼承・批判から出發せねばならない。先生のほう大な研究成果は、單に政治史の範疇に留まらず、各民族の動向に及び、文獻批判の嚴密さ、推論の深さに於いても、後學の研究の礎石となつてゐるからである。

(河内 良弘)